柴田町文化財調査報告書第５集

寺　前　遺　跡

－令和２年度：農業競争力強化基盤整備事業関連遺跡調査報告書Ⅱ－

令 和 ３ 年 １ ２ 月

宮城県　柴田町教育委員会

柴田町文化財調査報告書第５集

寺　前　遺　跡

－令和２年度：農業競争力強化基盤整備事業関連遺跡調査報告書Ⅱ－

令 和 ３ 年 １ ２ 月

宮城県　柴田町教育委員会

序　　文

柴田町には豊かな自然の中、国指定天然記念物の雨乞のイチョウや県指定史跡富沢磨崖仏群、明治時代から調査が行われ学術史的にも貴重な槻木貝塚群など、歴史的な遺産が数多く存在しています。これらの文化財は地域の人々によって大切に守り伝えられてきました。また、埋蔵文化財包蔵地(遺跡)は96箇所が登録されており、たゆみなく続いてきた人々の営みの痕跡が、今もそのまま土中に眠っています。柴田町の有形・無形の文化財は町民はもとより国民共有の財産であり、次世代への継承は、今を生きる私たちに与えられた重要な責務であると考えます。

しかしながら、私たちの生活様式の変化とともに、文化財を取り巻く環境もまためまぐるしい変化を遂げています。開発行為が増加し生活の利便性が向上する一方で、数百年、数千年の間守られてきた埋蔵文化財が、破壊や消滅の危機にさらされています。

このような中、当教育委員会では、開発機関と協議を重ね、多くの方々の理解と協力をいただきながら、文化財の後世への継承に努めているところです。

本書は、県営農業競争力強化基盤整備事業のほ場整備工事に伴い、令和２年度に本発掘調査を実施した寺前遺跡の調査成果をまとめたものです。

調査にあたりましては、地域の皆様や関係機関から多大なるご協力をいただきました。また宮城県教育庁文化財課からは、職員派遣による現地調査支援のほか、本書の刊行にあたりご助言を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

最後に、この成果が地域の歴史的解明の一助になりますことを願っております。

令和３年12月

柴田町教育委員会教育長　船迫　邦則

例　　言

1．本書は、宮城県柴田郡柴田町葉坂字寺前における農業競争力強化基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴い、令和２年度に実施した「寺前遺跡」の発掘調査報告書である。

2．調査は柴田町教育委員会が主体となり、柴田町教育委員会生涯学習課・宮城県教育庁文化財課が担当した。

3．発掘調査および資料整理・報告書の作成に際しては、宮城県教育庁文化財課の協力を得た。

4．本書に使用した各遺跡の位置図は、国土交通省国土地理院発行の「柴田郡」（1/25,000）の地形図を複製して使用した。

5．本書で使用した測量原点の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系による。調査区の各測量原点は第Ⅲ章に示した。なお、方位は座標北を表している。

6．本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。遺構番号は、遺構の種別に関わらず、調査の際に付した通し番号を用いている。

SI：竪穴建物跡　SD：溝跡　SK：土坑　P：柱穴・ピット

7．遺構平面図にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。

遺構全体図：1/300　各調査区図：1/80　竪穴建物跡：1/60　溝跡・土坑：1/60

8．土色の記述にあたっては、『新版　標準土色帳　1994 年版』（小山・竹原 1994）を用いている。

9．遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は 1/3（一部 1/2）で掲載している。

10. 本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て、畠山未津留（柴田町教育委員会）が執筆・編集した。

11. 本遺跡の調査成果については、現地説明会・遺跡見学会などでその内容の一部を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本報告書がこれらに優先する。

12. 発掘調査の記録や出土遺物は、柴田町教育委員会が一括して保管している。

目　　次

序　文
例　言
目　次
調査要項

第Ⅰ章　調査に至る経緯……1

第Ⅱ章　遺跡の概要……2
　第1節　地理的環境……2
　第2節　歴史的環境……2

第Ⅲ章　発掘調査……4
　第1節　調査地の位置……4
　第2節　確認調査について……4
　第3節　本発掘調査の方法と経過……4
　第4節　基本層序……6
　第5節　検出遺構と遺物……6

第Ⅳ章　総　括……14
　写真図版……17

引用・参考文献
報告書抄録

挿　図　目　次

第 1 図　寺前遺跡の位置……1
第 2 図　寺前遺跡と周辺の遺跡……3
第 3 図　調査区配置図……5
第 4 図　層序柱状図……7
第 5 図　調査区平面図……8
第 6 図　調査区断面図……9
第 7 図　SI101 竪穴建物跡平面図……10
第 8 図　SI101 竪穴建物跡出土遺物……11
第 9 図　SD102 溝跡断面図……12
第 10 図　SD103・104 溝跡断面図……12
第 11 図　SD104 溝跡出土遺物……12
第 12 図　Ⅲ層出土遺物……13
第 13 図　Ⅰ層出土遺物……13

写 真 目 次

写真１　調査風景（１区）……6
写真２　調査風景（２区）……6
写真３　１区北壁堆積状況　……7
写真４　２区北壁堆積状況　……7

写真図版目次

写真図版１　寺前遺跡付近の空中写真……17
写真図版２　１区遺構　……18
写真図版３　１区遺構　……19
写真図版４　１～４区遺構　……20
写真図版５　出土遺物　……21

調 査 要 項

遺 跡 名：寺前遺跡（No.08023）
遺跡記号：TM
所 在 地：宮城県柴田郡柴田町葉坂字寺前
調査原因：農業競争力強化基盤整備事業（県営ほ場整備事業）
調査主体：柴田町教育委員会
調査担当：柴田町教育委員会生涯学習課　宮城県教育庁文化財課
調査期間・面積：
［確 認 調 査］　平成 30 年（2018）10 月 9 日～ 10 月 10 日　45㎡
［本発掘調査］　令和２年（2020）７月 13 日～ 10 月９日　2,158㎡
調 査 員：［確 認 調 査］（町）小玉　敏　浅野章夫　水戸拓也　（県）山田晃弘　鈴木貴生
［本発掘調査］（町）畠山未津留　岡山卓矢　土岐山武　大久保政勝
（県）佐久間光平　矢内雅之　熊谷亮介
調査協力：宮城県教育庁文化財課　宮城県大河原地方振興事務所　葉坂地区圃場整備推進協議会

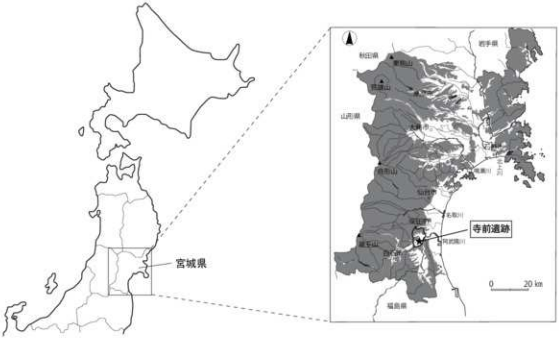
第Ⅰ章　調査に至る経緯

今回の発掘調査は、柴田町葉坂地区の農業競争力強化基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴うものである。この基盤整備事業を踏まえ、事業主体である宮城県大河原地方振興事務所から、葉坂地区ほ場整備事業計画に係る協議書の進達（平成 29 年 10 月 30 日付）がなされた。これに対し、宮城県教育委員会からは、当該地域の確認調査を要する旨の通知（平成 29 年 12 月 18 日付）があった。

これを受けて、柴田町教育委員会では宮城県教育庁文化財課の協力のもと、平成 30 年 4 月 9・10 日に計画地内で分布調査を実施した。その結果、寺前遺跡（古代の散布地）の隣接地で遺物（土師器等）が採取された。それを受け、柴田町教育委員会は宮城県教育庁文化財課の協力を得て、平成 30 年 10 月 9 日～ 11 月 20 日の日程で寺前区域など 6 区域において確認調査を行った。その結果、今回の本発掘調査の対象となった寺前区域の確認調査トレンチからは、溝跡やピットなどの遺構が検出された。

当初の整備事業計画では、寺前区域では田面の切土・盛土、承排水路の設置であったが、設計変更の必要性が生じ、最終的に調整池と管理用道路に変更になった。このため、柴田町教育委員会・宮城県教育委員会・宮城県大河原地方振興事務所の三者による再協議を行い、本発掘調査の対象区域や調査期間などの見直しを図った。こうした経緯を経て、当該区域の発掘調査は柴田町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財課の協力のもとに令和 2 年 7 月～ 10 月の期間に実施することになった。

なお、当該区域は寺前遺跡の南側隣接地であったが、周辺地形や今回の調査結果を受け、従来の寺前遺跡の範囲を拡大し、今回の調査区域も寺前遺跡（令和 3 年 4 月 28 日：範囲変更届）として取り扱うことになった。



第 1 図　寺前遺跡の位置

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　地理的環境

柴田町は宮城県南部、県庁所在地である仙台市の南方約 25㎞に位置している（第１図）。町域は奥羽山脈と阿武隈山地に連なる標高 100 ～ 150m の山地に囲まれており、町域南東部の白石川流域に開けた船岡盆地と北東部の阿武隈川流域に開けた槻木盆地からなる。両盆地は白石川と阿武隈川よって形成された沖積地で、旧流路沿いには幾筋もの自然堤防が発達し、集落や旧街道はこれらの微高地上に形成されている。自然堤防の後背地はかつて谷地や沼沢地であったと考えられる。

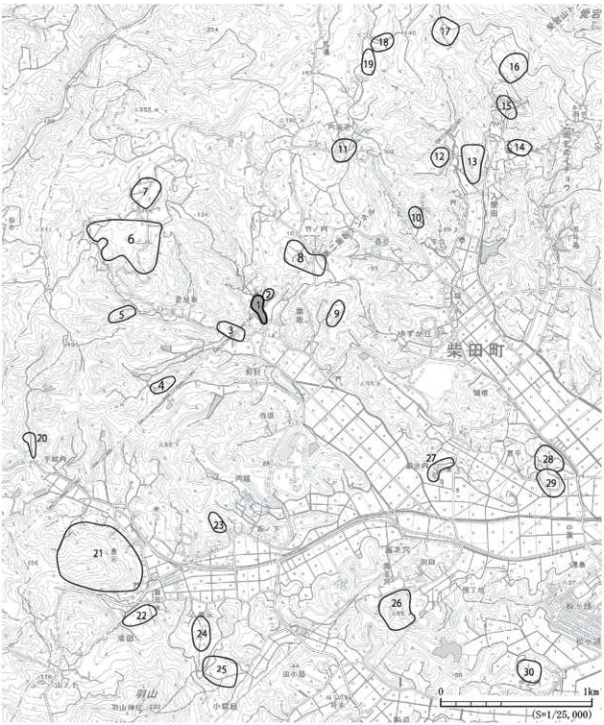
また、船岡・槻木盆地は、縄文時代前期には海岸線が複雑に入り組む内海であった。奥羽山地から延びる上川名（かみかわな）・入間田（いりまだ）・葉坂（はざか）・海老穴（えびあな）・成田（なりた）などの丘陵は、かつての半島状地形の名残である。これらの丘陵部の露頭には現在も海蝕崖を見ることができる。縄文時代早期から中期にかけて、これらの丘陵上には集落がつくられ、松崎貝塚、上川名貝塚、中居貝塚、館前貝塚などから成る「槻木貝塚群」が形成された。海退後の沖積作用により多くの縄文遺跡が埋没しており、過去には金谷貝塚の南に 200m 離れた水田で、地下 8m から縄文時代の櫂３本が出土した例もある。

今回の調査地である寺前遺跡は槻木盆地の北西部、槻木駅から約４㎞の位置にある。槻木盆地は、西に向かうほど複雑な開析谷に姿を変え、やがて富沢、入間田、葉坂、成田、船迫（ふなはさま）の５つの支谷となって奥羽山脈に突き当たる。寺前遺跡はこれらの支谷のひとつである葉坂地区に位置している（第２図）。

第２節　歴史的環境

今回の調査地が位置する槻木盆地を見ると、沖積作用によって形成された平野部には遺跡が少なく、盆地にせり出した丘陵上に多くの遺跡が分布することがわかる。特に標高 5~10m 前後の低丘陵の斜面上には複数の貝塚が分布し、槻木貝塚群を形成している。標高が高まるにつれ、縄文時代から中世に至る各時代の遺跡が確認できるようになる。

今回の調査対象地である寺前遺跡の周辺にも、比較的多くの遺跡が分布する（第２図）。寺前遺跡（１）の北東隣接地には、時代・性格は不明であるが、製鉄関連遺跡とされる鍛冶屋坂遺跡（２）が隣接する。寺前遺跡の谷を隔てた 140m 西側の低丘陵上には、葉坂戸ノ内遺跡（３）がある。東北新幹線敷設工事の際に発掘調査が行われ、平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡等が検出された（宮城県教育委員会 1980）。また、縄文時代から中近世に至る遺物も出土している。さらに、この同丘陵上の北西１㎞の地点には、町史跡である葉坂遺跡（６）が位置している。遺跡の全容は不明だが、昭和 41 年に遺跡の一部で試掘調査が行われた際には、竪跡などが確認されている。出土遺物などから縄文時代中期～晩期、弥生時代、平安時代の集落跡と推定されている（柴田町史 通史編Ⅰ）。



番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	**寺前遺跡**	丘陵麓	散布地	縄文・弥生・古墳・古代・中世	11	内海館遺跡	丘陵斜面	集落	縄文中	21	前田館跡	丘陵	城跡	中世
2	観音屋敷遺跡	丘陵麓	製鉄	不明	12	入間田横穴遺跡	丘陵麓	散布地	縄文・古代	22	町史跡　許元向遺跡	丘陵麓	散布地	縄文中～晩
3	菊坂/ドノ内遺跡	丘陵麓	集落	縄文中・後・弥生・古墳・平安・近世	13	入間田館跡	丘陵	城跡	中世	23	坂ノ下遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・古代
4	大沢田遺跡	丘陵	散布地	古代	14	坂中遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文中	24	坂元遺跡	丘陵	散布地	縄文中
5	新谷沢遺跡	丘陵斜面	製鉄	不明	15	大畑遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・古代	25	町史跡　向畑遺跡	丘陵麓	散布地	縄文中・後
6	町史跡　菊坂遺跡	丘陵斜面	集落	縄文中～晩・弥生・平安	16	子山遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文晩	26	鍛冶遺跡	丘陵	城跡	中世
7	西多沢遺跡	丘陵	散布地	縄文	17	沼坂遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文中	27	観音内遺跡	丘陵	製鉄	不明
8	竹ノ内遺跡	丘陵斜面	散布地	古代	18	西ノ籠遺跡	丘陵斜面	散布地・製鉄	縄文・不明	28	湯町館跡	丘陵	城跡	中世
9	惣代遺跡	丘陵斜面	散布地	古代	19	前原遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文中・古代	29	町史跡　湯町貝塚	丘陵	貝塚	縄文前～後
10	寺遺跡	丘陵斜面	製鉄	不明	20	地蔵沢遺跡	丘陵麓	散布地	縄文・古代	30	中ノ内遺跡	丘陵	散布地	縄文

第２図　寺前遺跡と周辺の遺跡

第Ⅲ章　発掘調査

第１節　調査地の位置

今回の調査地は、槻木盆地北西部の開析作用により形成された支谷の奥部にあたり、標高 60 ～ 80m の低丘陵に挟まれた沢状地形に位置している。調査地の標高は最も高い北西端部で 20m、最も低い南端で 17m である。対象地は水田であるが、高低差があるため、棚田状に開削されている。これより沢の上流部では、平地部分がさらに狭隘となり、畑地が主体となる（第３図）。大雨の際には雨水が沢に集中することから、調査区周辺は近年まで鉄砲水や土石流に悩まされた地域でもある。

第２節　確認調査について

葉坂地区は場整備事業計画を受けて実施した分布調査の際、土師器の破片が採取された。そのために、周辺一体の確認調査を 2018 年 10 月９日～ 11 月 20 日に行い、寺前区域においては 10 月９・10 日の２日間に実施した。確認調査は承排水路の計画ルート上に８箇所のトレンチ（T1 ～８）を設定して実施した（第３図）。各トレンチは幅 3m、全長は 5m ほどである。その結果、T1 ～３で、遺構密度は低いものの、溝跡とピットの分布を確認した。また、下層（Ⅵ）には土砂崩れ等によるとみられる砂礫層が広がることや、T3 より東側（T4 ～８）では、湿地性の堆積層が分布することを確認した（第４図）。いずれの地点でも遺物は出土しなかった。

第３節　本発掘調査の方法と経過

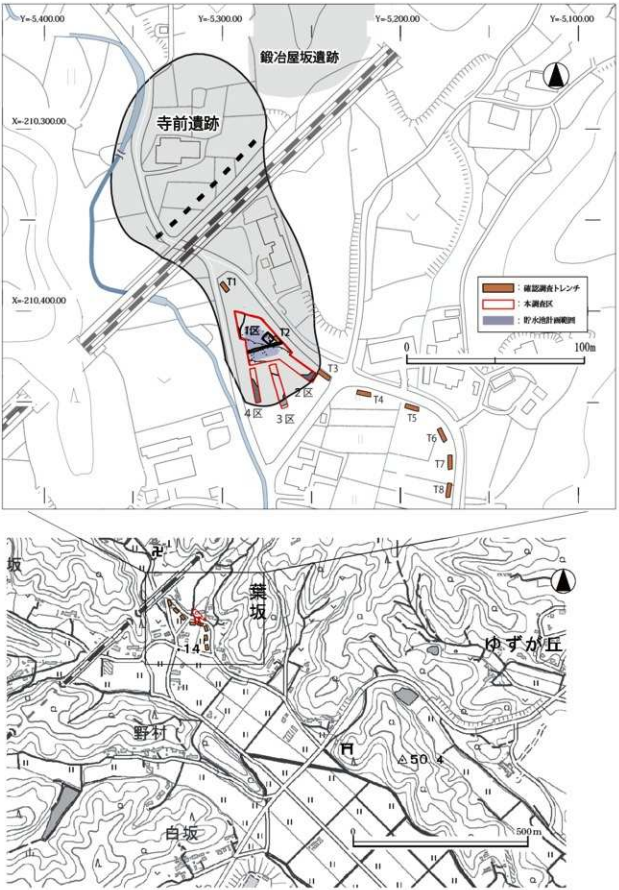
本発掘調査は 2020 年７月 13 日～同年 10 月９日に実施した（写真１・２）。当該地区は南に向かって緩やかに傾斜しており、調査区北西端部が最も高く標高 21m、約 100m 離れた南端部で標高 17.5m である。調査は標高の高い北側の１区から着手し、１区→４区の順に進めた（第３・５図）。遺構は標高の高い１区で検出したが、それより低い２・３・４区では検出しなかった。発掘調査の総面積は 2,158㎡である。

表土等の掘削はバックホー（0.45㎥）を使用した。各調査区の深さは－ 60㎝前後である。検出面下の地層を確認するため、調査区の一角（50㎝× 50㎝）をスコップで深堀し、ハンドオーガーも併用した。

平面図（調査区）の記録に際しては、トータルステーション及び電子平板システム（遺構くん）を用いた。測量にあたっての基準点３点（第５図：BM1・BM2・BM3）を使用した。座標値は以下のとおりである。

BM1：X=－ 210,400.150　Y=－ 5,287.802　BM2：X=－ 210,427.841　Y=－ 5,296.785

BM3：X=－ 210,423.582　Y=－ 5,250.583


Y=-5,400.00
Y=-5,300.00
Y=-5,200.00
Y=-5,100.00
X=-210,300.00
X=-210,400.00
鍛冶屋坂遺跡
寺前遺跡
T1
T2
T3
T4
T5
T6
T7
T8
1区
2区
3区
4区
：確認調査トレンチ
：本調査区
：貯水池計画範囲
0
100m
葉坂
ゆずが丘
野村
白坂
500m

第 3 図　調査区配置図

写真１　調査風景（１区・北東から）

写真２　調査風景（２区・南東から）

断面図は基本的に縮尺＝ 1/20 で作成した。地層の柱状図も適宜作成した（第４図）。写真撮影には一眼レフデジタルカメラ（Nikon D610　2,426 万画素）を使用した。

調査は、調査員４人、作業員は１日平均 12 人体制で実施した。作業を実施するにあたり、コロナウィルス感染拡大防止対策として、出勤前の検温・記録、就業前の体調の報告を義務づけし、休憩時の密集を避ける等の対策を講じた。８・９月は熱中症対策として、現場に熱中症対策用のセンサーを設置し、危険な場合には作業の中断を行った。９月５日（土）には一般に向けた遺跡見学会を開催し、20 人の参加があった（写真図版４－⑦）。また、９月 11 日には船迫中学校の地域学習の一環として、見学会が行われた（写真図版４－⑧）。発掘調査は９月 29 日（火）に終了し、調査区全域の埋め戻し等は 10 月９日までに終了した。

第４節　基本層序

基本層序は次の通りである。Ⅰ層：現表土（水田および畑耕作土、層厚 30 ～ 90㎝、地点により $Ⅰ_1$～$Ⅰ_4$ に細分）、Ⅱ層：黒褐色シルト（層厚 10 ～ 15㎝）、Ⅲ層：黒色シルト層（旧表土、層厚 30 ～ 40㎝、φ 0.5 ～ 1 ㎝の風化礫を僅かに含む）、Ⅳ層：湿地性堆積層（40㎝以上）、Ⅴ層：暗褐色シルト層（10 ～ 20㎝）、Ⅵ層：砂礫層である。各調査区の層序は第４図の柱状図で示した。遺構の検出は、Ⅴ～Ⅵ層上面で行った。

第５節　検出遺構と遺物

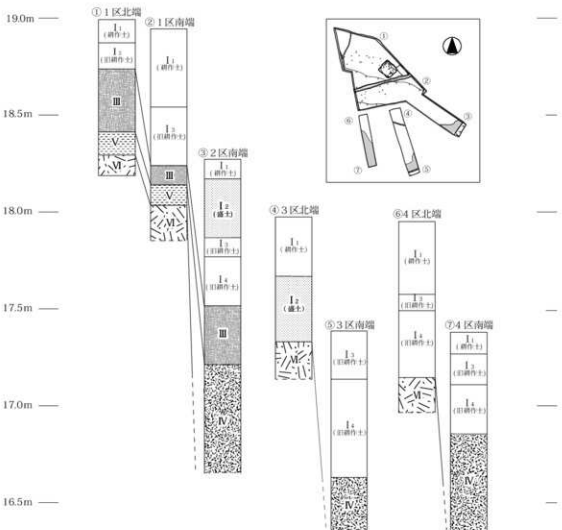
（１）検出状況

調査地は沢に沿って形成された緩斜面上にあり、３段の棚田に開田されている。上段と下段にはそれぞれ１ｍの高低差がある。この棚田の上段部の調査区を１区、下段部に設定したトレンチを２～４区として調査を行った。いずれの地点でも旧表土層とみられるⅢ層（黒色シルト）が削平されている。そのため１区で確認した遺構も残存状態は悪く、２～４区では遺構は確認できなかった。

遺構は１区で竪穴建物跡１棟、溝跡３条を検出した（第５図）。また、２～４区の南端では、南東方向に広がる湿地性の堆積層を確認した。（第５・６図）

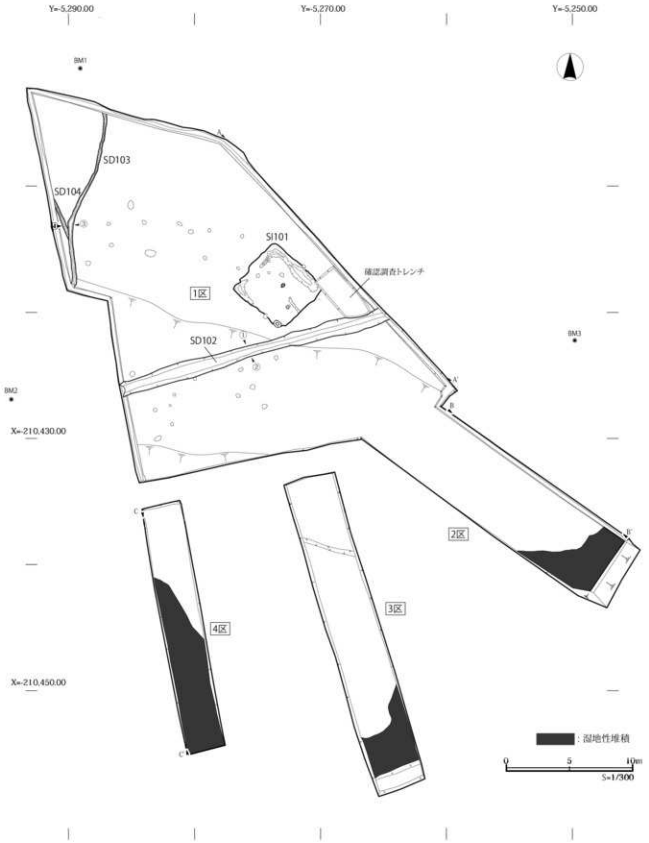
写真３　１区北壁堆積状況（南西から）

写真４　２区北壁堆積状況（南東から）

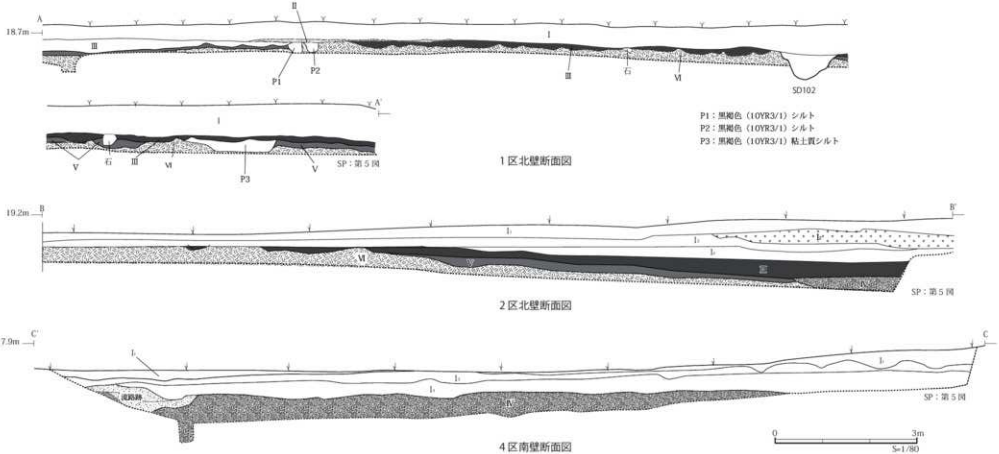


Ⅰ層：黒褐色土（現表土・耕作土・旧耕作土・盛土）
Ⅱ層：黒褐色シルト（漸移層）１区の一部にのみ分布。
Ⅲ層：黒色シルト（旧表土）風化礫（φ0.5 ～ 1 cm）を僅かに含む。
Ⅳ層：黒色粘土（湿地性堆積土）T2 ～ 4 の南部を起点とし、南へ広がる。
Ⅴ層：暗褐色シルト 砂粒を多く含む。
Ⅵ層：多量の砂礫・岩石（1 ～ 30 cm）を主体とする。

第４図　層序柱状図


Y=-5,290.00
Y=-5,270.00
Y=-5,250.00
BM1
BM2
BM3
X=-210,430.00
X=-210,450.00
SD103
SD104
SI101
確認調査トレンチ
1区
SD102
2区
3区
4区
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
I
I'
J
J'
K
K'
L
L'
M
M'
N
N'
O
O'
P
P'
Q
Q'
R
R'
S
S'
T
T'
U
U'
V
V'
W
W'
X
X'
Y
Y'
Z
Z'
: 湿地性堆積
0
5
10m
S=1/300

第５図　調査区平面図



層	土色	土性	備考
Ⅰ	黒褐色	土	現表土（Ⅰ3）・盛土（Ⅰ2）・旧耕作土（Ⅰ1・Ⅰ4）
Ⅱ	黒褐色	シルト	（暴掘層）1区にのみ分布。全体に風化礫（φ 5cm）を混入する。
Ⅲ	黒色	シルト	（旧表土）風化礫（φ 1cm）を少量含む。土器片を含む。
Ⅳ	黒色	粘土	（部地性堆積土）T2～3の堆部を起点とし、南へ広がる。
Ⅴ	暗褐色	シルト	砂粒を多く含む。
Ⅵ	――	砂礫層	礫・岩石（φ 1-30cm）を主体とする。調査区全域に分布する。

第６図　調査区断面図

（2）遺構と遺物

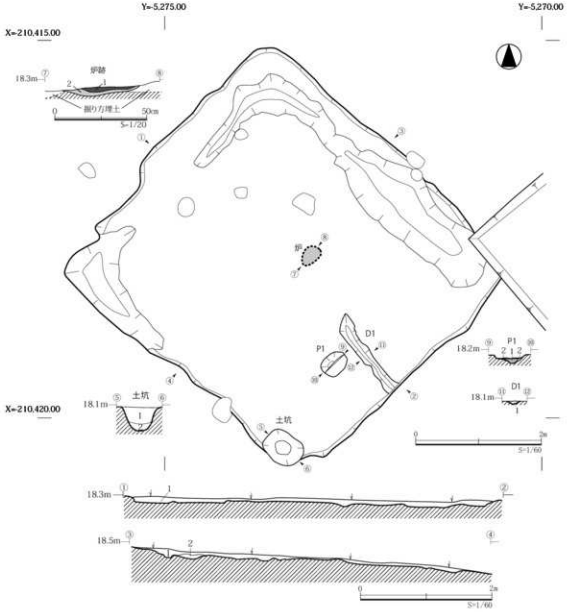
1）古墳時代

竪穴建物跡

【SI101】（第５・７図、写真図版２－⑥～⑧、３－①～⑦）

[位置・確認面] １区中央の東側、Ⅴ層で検出した。

[重複] 重複はない。



遺構	層	土色	土性	備考
SI101	広一②一	1	黒褐色（10YR2/2）	シルト	切層由来の小礫（φ１～３cm）を含む。SI101の掘り方埋土。粘性あり、締まりあり。
	広一③一	2	黒褐色（10YR3/3）	砂質シルト	切層由来の小礫（φ0.5～1cm）を50%含む。SI101の掘り方埋土。粘性ややあり、締まりあり。
	炉跡	1	明赤褐色（5YR3/4）	シルト	被熱による赤色変化。粘性ややあり。締まりややあり。
		2	黒色（7.5YR2/1）	シルト	被熱による黒色変化。炭化物と焼土ブロック（φ5mm）をやや多く含む。粘性ややあり。締まりややあり。
	土坑	1	黒色（10YR1.7/1）	粘土質シルト	しまりなし。風化礫（φ1cm）を1%混入する。土器を含含する。人為。
		2	黒褐色（10YR2/3）	粘土質シルト	しまりなし。風化礫（φ1cm）を5%混入する。自然堆積。
	P1	1	黒褐色（10YR2/3）	粘土質シルト	切層由来の小ブロック（φ1～3cm）を10%混入する。風倒は丸みを帯びており、色調が明い。
		2	黒褐色（10YR4/2）	シルト	切層由来の小ブロック（φ0.5～1cm）を主体とする。
	D1	1	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	風化礫（φ1～3mm）を1%含む。締まりあり。

第７図　SI101 竪穴建物跡平面図

[平面形・規模] 開田による削平のため床面はほぼ失われている。平面形は長辺 5.4m ×短辺 5.0m の方形を基調とする。建物の方向は、北で 50 度、西に偏している。

[壁] 残存していない。

[床] 残存していない。

[柱穴] 確認できなかった。

[炉] 建物中央よりやや北寄りで、被熱により赤変する箇所を確認した。範囲は長軸 36㎝× 26㎝の不正楕円形である。赤変の厚さは約 6 ㎝である。

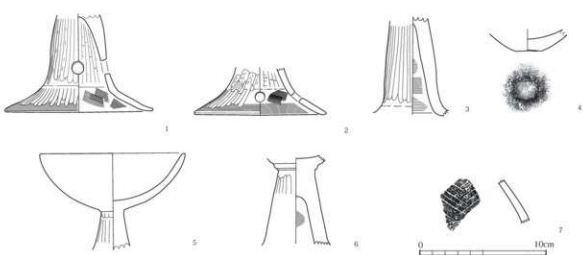
[周溝] 確認できなかった。

[土坑] 南東隅で検出した。平面形は長軸 64㎝×短軸 47㎝の不正楕円形で、深さが 38㎝である。埋土は２層認められ、上層が人為的埋土の黒色粘土質シルト、下層が自然堆積の粘土質シルトである。

[ピット] 住居跡の南東部でピット１基（P1）を確認した。長軸 45㎝×短軸 35㎝の楕円形で、長軸は東壁に並行する。検出面からの深さは 10㎝である。断面形は、底部が浅い円弧状である。埋土は２層に分けられ１層が黒褐色粘土質シルト、２層が灰黄褐色シルトである。

［溝跡］南東壁と直交する溝跡（D1）を検出した。長さは 1.4m、幅は 20㎝、深さは 5 ㎝前後である。埋土は１層で、黒褐色粘土質シルトである。

[出土遺物] 遺物は土坑から赤彩された土師器高坏（第８図－１・２・３）、小型丸底鉢（第８図－４）が出土した。また建物跡の掘り方埋土から土師器高坏（第８図－５・６）、弥生土器（第８図－７）が出土している。



No.	器種	遺構・層	法量（cm）			特徴	写真	登録
			口径	底径	器高			
1	土師器 高坏	土坑・埋１	-	(11.8)	-	外：「脚」ケズリ→ミガキ 「脚」ヨコナデ→ミガキ 内：「脚」ハケケズリ 「脚」ハケメ→ヨコナデ 外面に赤彩あり。	5-1	TM-1
2	土師器 高坏	土坑・埋１	-	(10.6)	-	外：「脚」ケズリ→ミガキ 「脚」ヨコナデ→ミガキ 内：「脚」ハケケズリ 「脚」ハケメ→ヨコナデ 外面に赤彩あり。	5-2	TM-16
3	土師器 高坏	土坑・埋１	-	-	-	外：ミガキ 内：ユビナデ 外面に赤彩あり。	5-3	TM-17
4	土師器 小形丸底鉢	土坑・埋１		2		底部にくぼみを伴う凹底（浮台 2m）。	5-4	TM-21
5	土師器 高坏	掘り方埋土	11.4	-	-	内外：ヘラメラ	5-5	TM-19
6	土師器 高坏	掘り方埋土	-	-	-	外：ミガキ 内：ユビナデ	5-6	TM-18
7	弥生土器	掘り方埋土	-	-	-	体部破片 二条一対の平行沒線文 幅約 4 ㎜、十三原式。	5-7	TM-20

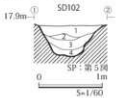
第８図 SI101 竪穴建物跡出土遺物

2）時期不明

溝跡

【SD102】（第５図、写真図版３－⑧、４－①）

１区中央よりやや南側で検出した東西方向の溝跡である。重複はない。規模は検出総長14m、上幅80～1.5m、下幅30～80cm、深さ50cmである。断面形は上の開いたＵ字または逆台形状である。堆積土は４層で、いずれも均質な粘土質シルトである。遺物は、中位より土師器高坏の小片などが数点出土した。



層	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色（10YR3/1）	粘土質シルト	砂粒、小礫を多く含む。やや粘りあり。縞まりあり。
2	黒褐色（10YR3/1）	粘土質シルト	純い黄褐色粘土質シルトのブロック（φ２～５cm）を５～10％混入する。
3	黒褐色（10YR3/1）	粘土質シルト	軟質で砂を多く含む。縞まりなし。
4	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	区域の流れ込みを主体とする。砂を多く含む。

第９図　SD102 溝跡断面図

【SD103】（第５図）

１区西側で検出した蛇行する南北方向の溝跡である。SD104 と重複し、それよりも新しい。規模は検出総長14m、上幅15～50cm、断面形は浅いＵ字形を呈しており、深さは５～15cmである。堆積土は黒褐色粘土質シルトの自然堆積である。出土遺物はない。

【SD104】（第５図）

１区西側で検出した南北方向の溝跡である。SD103 と重複し、それよりも古い。規模は検出総長2.7m、上幅20～30cm、下幅35～20cm、断面形は浅いＵ字形を呈しており、深さ5cmである。堆積土は１層で黒褐色粘土質シルトの自然堆積である。縄文土器（第11図－１）が出土している。

遺構	層	土　色	土 性	備　考
SD103	1	黒褐色（10YR3/1）	粘土質シルト	黄褐色シルトの小粒（φ１～３mm）や礫を含む。酸化鉄を多く含む。自然堆積。
SD104	1	黒褐色（10YR3/1）	粘土質シルト	黄褐色シルトの小粒（φ１～３mm）や礫を含む。酸化鉄を多く含む。自然堆積。

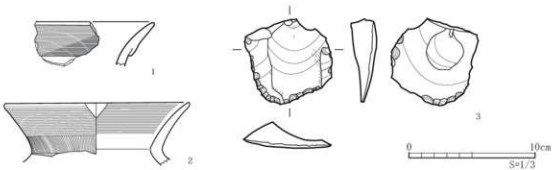
第10図　SD103・104 溝跡断面図

No.	器種	層	法量（cm） 口径	底径	器高	特徴	写真	登録
1	縄文土器　深鉢	1層	（18.4）	－	－	内外：マメツ　口縁部に突起あり。縄文後期。	5-8	TM-25

第11図　SD104 溝跡出土遺物

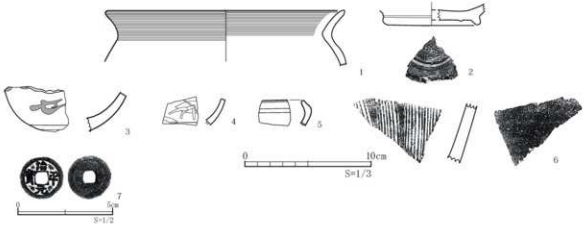
3）その他の遺物

１区のⅢ層からは、土師器壺（第12図－１・2）、不定形石器（第12図－３）が出土している。Ⅰ層からは土師器甕（第13図－１）、土師器高台坏（第13図－２）、近世の陶磁器（第13図－３・４・５・６）、銭貨（第13図－７）が出土している。



No.	器種	層位	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴	写真	登録
1	土師皿 壺	Ⅲ	(14.0)	—	—	外：縦台目痕　ヨコナデ　内：ヤメヤ	5-9	TM-7
2	土師皿 壺	Ⅲ	(14.8)	—	—	外：ハケメ→ヨコナデ　内：ヨコナデ	5-10	TM-11
3	不定形石器	Ⅲ	—	—	—	4.3×4.6×1.3cm　結晶質岩	5-11	TM-22

第 12 図　Ⅲ層出土遺物



No.	器種	層位	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴	写真	登録
1	土師皿 鍋	Ⅰ	(19.0)	—	—	外：ヨコナデ　内：ヤメヤ	5-12	TM-4
2	土師皿 高台付	Ⅰ	—	(7.6)	—	外：不明　内：剥離不明　底部：不明	5-13	TM-13
3	磁器 碗	Ⅰ	—	—	—	染付碗【器形】：外面底部に二重圏線、内面底部に圏線あり　【胎土】10GY8/1 明緑灰色　産地不明	5-14	TM-21
4	磁器 丸碗	Ⅰ	—	—	—	染付碗【器形】：外面・内面底部に圏線あり、外面に二重松か　【胎土】7.5GY8/1 明緑灰色　産地不明	5-15	TM-2
5	陶器	Ⅰ	—	—	—	外面に鉄釉　内面に灰釉【胎土】7.5GY7/1 明緑灰色で均質・緻密　和焼大甕焼か	5-16	TM-14
6	陶器 徳利	Ⅰ	—	—	—	内外面に鉄釉【胎土】5G4/1 緑灰色で均質・緻密　産地不明	5-17	TM-6
7	銭貨	Ⅰ	—	—	—	治平元寶　真書体　初鋳 1064 年（北宋）	5-18	TM-23

第 13 図　Ⅰ層出土遺物

第Ⅳ章　総括

今回の調査で検出した遺構は１区の竪穴建物跡１棟、溝跡３条などで、遺構の分布はきわめて希薄である。出土した遺物も少ない。ただし、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中・近世と、幅広い年代の遺物が出土している。

竪穴建物跡（SI101）は、出土遺物の特徴などから古墳時代前期と考えられる。溝跡（SD102・103・104）については、時期を絞り込むことができなかった。

(1) SI101 竪穴建物跡

後世の削平を受けているため残存状況は不良であったが、出土した土器類や竪穴建物跡の構造的な特徴についてまとめておきたい。

①土器類の特徴と時期

点数は少ないが、南東隅の土坑と建物掘り方埋土などから、古墳時代前期の塩釜式（氏家 1957）に位置づけられる土師器類が出土している。

土坑からは、高坏脚部３点、小型丸底鉢とみられる底部破片１点が出土しており、次の特徴が観察できる。第８図１は高坏脚部で、脚上部が円柱状、下部が円錐台状である。円錐台部は裾から直線的に立ち上がる「ハ」の字状で、円柱部との接続部が屈曲する。脚中部外面は僅かなふくらみを持ち、円窓が３孔ある。外面調整は丁寧なヘラミガキである。脚内部は脚上部まで中空で、円錐台内側はハケメ調整である。第８図２も高坏脚部で、内外面の調整は前述の１と同様だが、円錐台上部と円柱部の接続部に屈曲がなく、緩やかな「八」字状である。また、第８図３の高坏脚部は、外面調整がヘラミガキ、内面はユビナデ、脚中部外面が僅かにふくらむ。第８図４は小型丸底鉢の底部とみられ、小さなくぼみ（凹底）がある。

建物掘り方埋土からは高坏２点が出土している。第８図５の高坏は、脚部から口縁にかけて内湾しながら立ち上がる。脚部は中実で、外面はヘラミガキが施される。第８図６の高坏脚部は、脚上部が柱状中空で、杯と脚部の接続部に段が認められる。

こうした特徴を持つ資料は、岩沼市北原遺跡（宮城県教育委員会 1993）、亘町宮前遺跡（宮城県教育委員会 1983）などにみられる。塩釜式土器の編年を検討した辻（1994・1995）や青山（2010）らによれば、これらの資料は辻編年のⅢ－２～４期、青山編年の２式古相～新相段階に相当し、時期的には古墳時代前期中葉頃と考えられている。SI101の出土資料も、ほぼこれらと同様の時期に位置づけられるものとみてよいだろう。

②内部施設の性格

建物跡の内部では主柱穴や周溝などは確認できなかったが、中央付近では焼面、南東隅では土坑が検出されており、この土坑内部からは高坏や小型丸底鉢とみられる土師器が出土している。また、南東壁から中央へ延びる溝跡と、これに隣接する小ピットが検出されている。

このような遺構を伴う古墳時代前期の竪穴建物跡は、野田山遺跡（宮城県教育委員会　1992）、北原遺跡（宮城県教育委員会　1993）などでも確認されているが、これらの竪穴建物跡においては、

中央付近の焼面は「炉」、建物の隅にある土坑は「貯蔵穴」、また、溝は建物内部を区画するためのもの、ピットは建物に出入りする施設（梯子など）に関わるピットではないかと考えられている。SI101竪穴建物跡の内部で検出された各遺構も、こうした性格を持つものであった可能性があると考えられる。

(2) 溝跡について

大小３条の溝跡を検出したものの、いずれも時期の特定は困難であった。SD102溝跡は東西方向に延びる、上幅1.0m、深さ50cmほどの直線的な溝跡であるが、調査区北壁で確認すると、Ⅲ層（旧表土）から掘りこまれた溝跡で、時期的には近世以前と考えられる。ただし、古墳時代前期のSI101竪穴建物跡とは方向も異なり、この時期までは遡らないとみられる。

(3) 寺前遺跡の範囲と時期

調査地点は、沢地の奥部にある周知の寺前遺跡から標高を徐々に下げる緩やかな斜面上に位置しているが、今回の発掘調査によって、調査区の中央付近を境に南東側は湿地になることが判明した。今回の調査地点は、こうした地形的な位置関係や遺構分布状況の希薄さ、出土遺物の少なさなどからみて、遺跡の中心域からは外れた周縁部に当たり、遺跡の中心部はより北側の沢上部にある寺前遺跡付近と推定される。

これらの調査結果から、今回の調査地点までを新たな寺前遺跡の範囲と捉えることとし、周知の寺前遺跡の範囲を南側へ拡大した。また、出土点数はわずかではあるものの、縄文時代、弥生時代、古墳時代（前期）、古代、中・近世の各時期にわたる遺物が出土していることから、寺前遺跡はこれらの時期を含む複合遺跡と考えられる。

引用・参考文献

青山博樹　2010 『北杜―辻秀人先生還暦記念論集―』辻秀人先生還暦記念論集刊行会

青山博樹　2019 『古墳分布北縁地域における地域間交流解明のための実証的研究』福島大学行政　政策学類

岩沼市史編纂委員会　2018 『北原遺跡』『杉の内遺跡』岩沼市史４　資料編Ⅰ考古

大郷町教育委員会　2011 『鶴館遺跡』 大郷町文化財調査報告書　第２集

白石市教育委員会　2009『和尚堂遺跡　他』 白石市文化財調査報告書　第37集

白鳥良一　古川一明 『古墳時代の研究』６土師器と須恵器　８東北　雄山閣出版株式会社

仙台市教育委員会　2010 『沼向井遺跡第４～５次調査』仙台市文化財調査報告書　第360集　第３分冊

仙台市教育委員会　1976 『安久東遺跡』仙台市文化財文化財調査報告書　第10集

仙台市教育委員会　1982 『鴻巣遺跡』 仙台市文化財文化財調査報告書　第44集

仙台市教育委員会　1983 『中田畑中遺跡』仙台市文化財文化財調査報告書　第53集

多賀城市教育委員会　2009 『新田遺跡』多賀城市文化財調査報告書 第95集－多賀城市内の遺跡２－

築館町教育委員会　1992 『伊治城跡』 築館町文化財調査報告書　第５集

丸山　淳　1992 『塩釜式土器の変遷とその位置づけ』『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文抜粋

辻　秀人　1994 『東北南部における古墳出現期の土器編年―その１―』 東北学院大学論集史 学科創立30周年記念
第26号　東北学院大学学術研究会

辻　秀人　1995 『東北南部における古墳出現期の土器編年―その２―』 東北学院大学学術研究会
東北学院大学論集　第27号
名取市教育委員会　1979 『十三塚遺跡』名取市文化財調査報告書　第6集
名取市教育委員会　1980 『十三塚遺跡』名取市文化財調査報告書　第8集
名取市教育委員会　2018 『上余田遺跡』名取市文化財調査報告書　第70集
平塚幸人　2001 『仙台平野における小型丸底鉢について』仙台市富沢遺跡保存館研究報告4
宮城県教育委員会　1980 『大橋遺跡』 東北自動車道奇跡調査報告書Ⅳ
宮城県教育委員会　1983 『宮前遺跡』 宮城県文化財文化財調査報告書　第96集
宮城県教育委員会　1983 『朽木橋横穴古墳群　宮前遺跡』宮城県文化財文化財調査報告書　第96集
宮城県教育委員会　1985 『今熊野遺跡　他』 宮城県文化財調査報告書　第104集
宮城県教育委員会　1992 『野田山遺跡』 宮城県文化財文化財調査報告書　第145集
宮城県教育委員会　1993 『北原遺跡』 宮城県文化財文化財調査報告書　第159集
宮城県教育委員会　1996 『下草古城跡』 宮城県文化財文化財調査報告書　第169集
宮城縣史編纂委員会　1957 『弥生式文化の伝播』 宮城県史Ⅰ　古代史　中世史
山元町教育委員会　2015 『中筋遺跡』 山元町文化財調査報告書 第10集
山元町教育委員会　2014 『石垣遺跡』 山元町文化財調査報告書　第7集
矢本町史編纂委員会　1973 『塩釜式から南小泉式へ』 矢本町史　第二編古代
亘理町教育委員会　1997 『堀の内遺跡』　亘理町文化財調査報告書　第7集

1. 寺前遺跡周辺の空中写真　国土地理院（平成 29 年撮影：CTO20175-C11-12）　0　100m

2. 昭和 23 年撮影の空中写真　国土地理院（昭和 23 年撮影：USA-R1963-56）　0　100m

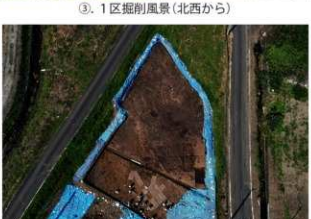
写真図版 1　寺前遺跡付近の空中写真

①．葉坂地区遠景（南東から）

②．着手前状況（南東から）

③．1 区掘削風景（北西から）

④．1 区検出風景（東から）



⑤．1 区全景（上が北西）

⑥．1 区 SI101 検出状況（南西から）

⑦．1 区 SI101（北西から）

⑧．1 区 SI101（上が北東）

写真図版 2　1 区遺構

①. 1区 SI101 炉跡 検出状況(南西から)

②. 1区 SI101 炉跡 半裁(南東から)

③. 1区 SI101 土坑 検出状況 (南から)

④. 1区 SI101 土坑 完掘状況(南西から)

⑤. 1区 SI101 溝跡(D1)とピット(P1)(南西から)

⑥. 1区 SI101 ピット(P1)断面(南西から)

⑦. 1区 SI101 掘り方　高坏出土状況 (東から)

⑧. 1区 SD102 溝跡 (西から)

写真図版3　1区遺構

①．1区 SD102 溝跡断面（西から）

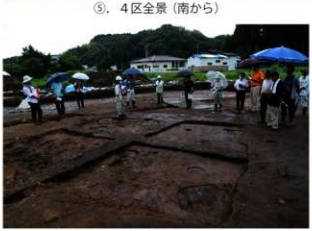
②．2区全景（南東から）

③．2区 北壁（南から）

④．3区 全景（北から）

⑤．4区全景（南から）

⑥．4北壁断面（南から）



⑦．遺跡見学会の様子

⑧．船迫中学校見学の様子

写真図版４　１～４区遺構

SI101 竪穴建物跡　土坑：1～4　1～3：土師器高坏　4：土師器小型丸底鉢
SI101 竪穴建物跡　盤状方埋土：5～7　5：土師器高坏　6：土師器高坏　7：弥生土器
SD104 溝跡：8　8：縄文土器　縮尺＝1/3　※括弧内は本文図版番号

II層：9～11　9：土師器壺　10：土師器壺　11：不定形石器
I層：12～18　12：土師器甕　13：土師器 高台坏
14：緑釉 碗　15：緑釉 丸碗　16：陶器　17：陶器 擂鉢　18：銭貨（治平元寶）
縮尺＝1/3（18は原寸）※括弧内は本文図版番号

写真図版5　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	てらまえいせき－れいわにねんど：のうぎょうきょうそうりょくきょうかきばんせいびじぎょうかんれんいせきちょうさほうこくしょⅡ－
書名	寺前遺跡
副書名	－令和２年度：農業競争力強化基盤整備事業関連遺跡調査報告書Ⅱ－
シリーズ名	宮城県 柴田町文化財調査報告書
シリーズ番号	第５集
編著者名	（柴田町）畠山未津留
編集機関	柴田町教育委員会
所在地	〒989-1692　宮城県柴田郡柴田町船岡中央２丁目３-45 TEL：0224-55-2111　FAX：0224-55-4172
発行年月日	2021年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 （㎡）	調査原因
てらまえいせき 寺前遺跡	みやぎけん しばたぐん 宮城県柴田郡 しばたまち はざか あざ 柴田町葉坂字 てらまえ 寺前	04323	08023	38度 6分 5秒	140度 46分 35秒	20200713 ～ 20201009	本発掘調査 2,158	令和２年度・農業競争力強化基盤整備事業（県営は場整備事業）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺前遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴建物跡、溝跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、銭貨	古墳時代の竪穴建物跡の他、時代不明の溝跡を検出した。

要約

県営ほ場整備に伴う調査の結果、竪穴建物跡１棟と溝跡３条を検出した。竪穴建物跡の年代は、土坑から出土した土師器高坏などから古墳時代前期中葉頃の遺構と推定される。溝跡の年代は不明である。

調査区の南側には湿地性堆積層が広がることから、今回の調査地点は寺前遺跡の中心からは外れた縁辺部と推定される。遺跡の中心は沢の上流部である可能性が高い。

なお、古墳時代以外にも縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代、江戸時代の遺物が出土したことから、寺前遺跡はこれらの時期を含む複合遺跡と考えられる。

柴田町文化財調査報告書第５集

寺　前　遺　跡

- 令和２年度：農業競争力強化基盤整備事業関連遺跡調査報告書Ⅱ -

令和３年 12 月 21 日印刷
令和３年 12 月 28 日発行

発行　柴田町教育委員会
宮城県柴田郡柴田町中央２丁目３-45
印刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町 24-24